スキーと山

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年一月三十日印刷納本

大正十四年二月一日發行（毎月一回一日發行）

第四十六號

札幌 スキーと山の會 發行

第四十六號目次

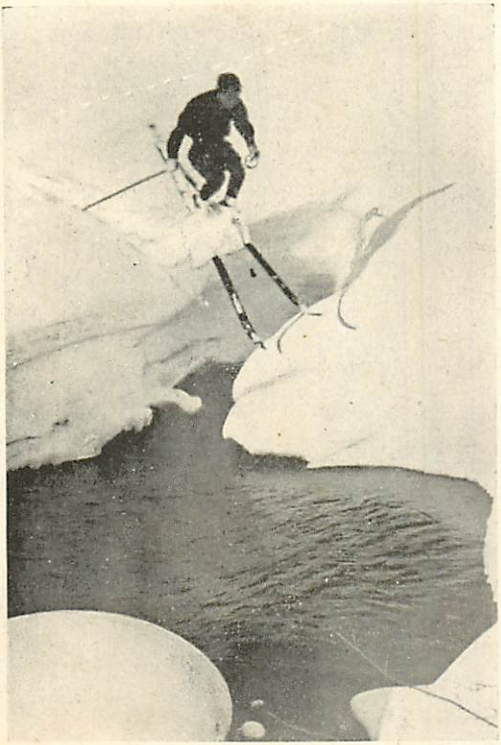
記事

スキージヤンピングの
スタイルジヤツチに關する私見　廣田戸七郎　〔二〕
スキーの長さ及幅　岡村源太郎　〔一〇〕
再び冬季登山と
スキー登山の定義について　大島亮吉　〔一八〕
彙報抄錄
〔全日本スキー聯盟の提議、新著評、札幌スキー倶樂部創立〕
〔全日本スキー大會各地方豫選　青森スキー倶樂部創立〕

寫眞版

ジヤンピングターン　長谷川敦

大正十四年二月發行



ジャンピングターン

長谷川　敦

冬の高いアルプに對してSkieurは最も卓越した滑走(グリッサード)の悅樂を得やうと言ふ樣な所期を有つて計畫をしたならば、それは必ず失望に終らねばならない。實際に於て其處には充分の滑走を味はうことの出來るのはたゞある限られた狀態にある少數の氷河(グラシエ)のみである。そしてその他のものは全く急峻にそゝり立つてSkieurに對しては何等滑走の興味を刺戟することのない鋭い岩のアレートや氷のカスカード、或ひはたゞ硬く波打つてつゞく雪の荒原のみであるから、其處には Grison や其他の低き山脈のうちに見出し得るやうな、ゆるやかな波及を以つてつゞく斜面(パント)の連續(セリイ)に求め得る純な滑走の悅樂とシャルムには極めて乏しいのである。

Marcel Kurz.

スキージャムピングのスタイルジャッヂに關する私見

廣田戸七郎

已に多くの方々が御存じの樣に、スキージャムピングのスタイルジャッヂにつきましては、是迄に各地に於て個人的の意嚮としていろ〳〵議論せられたことのあることを聞いて居ります故、私自身また大へんこんな問題をとらへて論じて見樣とすることには、少なからず心に何物かをつかへさして居る樣な氣持が致す次第であります。

夫れ故是から書いて行かうとすること、それは決して私の頭の中に考へて居る凡べてでは勿論ありません。そして又自分の小さい考へだけで滿足して居らうとも勿論考へて居りません。

たゞ尙多くの賢明なる御指導を心から仰ぎたい一心に外ならないものであります。

それから斯樣な抽象的な問題は、實際論者の立場を第一者にするとか第二者乃至第三者の立場に置くとか云ふことによつて、又相當に種々な考へ方、論じ方も生じて來ねばならぬ筈でありますから實際易々たる問題では決して無からうと思はれます。

スキージャムピングに於て、ジャムブスタイルを審査採點すると云ふことは、已に國際スキー競技規定に於ても制定せられ、又我が國に於けるスキー選手權競技會に於ても、此ルールが實行せられて居る。

私供はスタイルジャッヂ敢行是非について時期尚早云々を固持するの愚なるを知るものである。私供は正に如何にしてジャッヂメンはスタイルジャッヂを爲すべきかと云ふ問題を考慮するの切なるを、悟るべきにあらざるやと云ひたいのである。私供が正に一段と盛ならんとするスキージャムピング競技に於て、其ジャッヂの根本に觸るゝこと、それが現在の私供の爲すべき當面の問題であることを第一に考へねばならず、又考へるべきが至當であらうと思ふのである。

自分の一擧手一投足乃至は心的方面に立入つて自己を知ることは、或場合には他人の一擧手一投足を見て、他人の心的狀態を深く考察することに比して、遙かに容易な事柄である。洵に他人の一擧一動を見て其心的考察を爲すことは至難の事柄である。夫れ故この立脚點よりすれば單に外部に表はれたる他人の動作を鑑識することは甚だ容易な事柄であると解することが出來る。

然し百面百相の如く千人万思の點よりすれば單に外部に表れ來る動作に同樣の鑑識を望むことは不可能なことである。此點より考へても單に外部に表はさるゝに過ぎぬと云ふ諸動作の批評鑑別も亦甚だ困難なる問題に轉化して行くことを知るのである。此各々に見る體驗的缺點を補ふて、以て最も公平なる批評、鑑別を行ふ樣に私はスキージャムピングに起り來るスタイルジャッヂの問題を可及的具體化して考へて見たいと思ふのである。夫れが爲に私供は少くともジャムプに於けるスタイルジャッヂメンとしては、其方面の造詣深き經驗者を求め、そして其人に全ての權威を附與すべしと云ひたいのである。

斯くして凡べての信賴をジャッヂメンに置きFairな氣持で競技を行ひ得る人、夫れが眞のジャムバアであり、プラウドを有するスポーツメンに相違ないのである。

浩瀚に於て吾々の目擊するところのジャッヂメン對プレヤーの搔騷問題の多くは、單なる兩者の感情衝突の發露か乃至は各人の自責觀念の乏しきに見るものにして、一にジャッヂメンの無經驗、品性野卑、傲慢不遜、プレーヤーのフエイアなるざるこに起因するところが少くない。されば競技主催者には、施行すべき競技に對しジャッヂメンとして造詣深く最も理解あり、カルチュアのある人を撰擇するの義務があり、ジャッヂメンは自己の立場を充分自覺し、最も公正なる態度に出で、プレイヤーは又フエイアな氣分で、凡べての信賴を選定せられたるジャッヂメンに置かねばならぬのである。

競技に參加して其結果よりしてジャッヂメン不信任を唱ふるが如きは、最も下劣なる自己披露であらう、むしろかゝるプレイヤーは競技に參加せざる方が遙かに賢明である。

稍々抽象問題に轉じたるの嫌あれど、要するに私はスタイルジャッヂの具體的解釋として、スタイルジャッヂメンの具備すべき資格と、そして責任を考へ、更にジャッヂメンの行ふスタイルジャッヂ觀察方法の問題を考究して見たいと思ふのである。

スタイルジャッヂメンの資格と云ふことについては、已に前述せるところなれば、次に責任と云ふことを考へて見たいと思ふ。

凡そスキージャムピングには、アプローチに於けるクローチング、ダウン、サッツ、フライト、ランディング、ストレートランニングと云ふ樣に甚だ多くの諸動作が含まれて居り、是等の諸動作を完全に行ふと云ふことは、甚だ至難の事柄である。

然し凡べてのジャムパアにしろ、又熟練せるジャムパアにしろ、兎も角競技に參加し、そして競技を爲さんとするジャムパアは皆一樣に自己の有する技倆の全力を盡し、且つ自己最適の手段方法を選ばんとつとめて居るものである。即ち最も良好にして優秀なる結果を期し、而して眞劍なる態度を心掛けて居るものである。されば凡べてのジャムパアの諸動作を完全に通觀し、細微に渉つての審査採點に完全を期することは、スタイルジャッヂメンの爲すべき責任とも云ふべきである。されど神ならぬ人間術として、又缺點なきを保し難い。斯は人間として一樣に有する先天的缺陷とも見るべく、人爲的疑巧によつて釀成せらるゝ偏見例へば、或ジャムパアの一つのスタイルに對する單なる規準なき好惡の念よりする審査方法、又は自己の隷屬する團員のジャムプスタイルに對する事實以上の評價による結果とは到底同日に論じ得られぬ問題である。即ちスタイルジャッヂメンは此間の事柄を充分に考究し、一には人間の有する先天的缺陷の幾分をも少くし、一には人爲的疑巧なからんことにつとめ、而してジャムパアの心的苦衷を察し、以て公正なる鑑識の本に、自己の責任を全ふすることを心掛くべきでなからうかと思ふのである。思ふにジャッヂメンの資格とか、責任問題と云ふが如き抽象的見解に關しては、尙細目に渉つて考ふるならば、幾多の條件を數ふることを得べしと雖も、そ

れは餘りに私の論ぜんとする本論と遠ざかるやに思惟せらるゝ故好んで求めたくないと思ふのである。

次に私は、最も吾々ジャムパァの考へて行かねばならぬスタイルジャッヂの問題に關して、如何にしてジャムプスタイルを觀察し、而して採點すべきかと云ふ事柄を考へて見たいと思ふ。

ジャムプスタイルを觀察、採點する爲には、少くとも可成り具體化されたる標準スタイルと云ふものが明示されねばなるまいと思ふ。國際ルール並びにノルウエースキークラブの競技規定中には、是等の事柄は已に明示せられて居ることを知る。而して是は標準的の文字を與ふべきものであつて、決して理想飛型と云ふが如き絶對的の意義を有し勝の文字を使用すべきものでないと思ふのである。

私は今是からノールウエークラブの競技規定中に示されて居るジャムプスタイルの標準スタイルの概略を採錄して見ることにする。

アプローチ　滑走に當つてジャムパァは確實にして樂な姿勢をとらねばならぬ。而してスピードを減ずるやうなことをしてはいけない。上體は多少前方に寄り懸け、兩腕は側方に位置し、兩脚は極く輕く屈し、兩膝は完全に揃へ一方の足を多少他足の前方に出し、全姿勢を最も自然に保ち頑にならぬやうにし、そして兩スキーを適當に揃へねばならない。（此處迄はつまり滑出しの直滑降滑走に近い姿勢の説明である。而してクローチングダウンと稱すべき姿勢は、次のサッツの項で説明せられて居る。）

サッツ　シャンツエの前方に於て適當の時期に到らば、上體を層一層前方に屈し、而して一方の足を多少前出し、即ち他脚と一足に揃へ、體重も亦層一層前方に懸けつゝ兩脚に等分せねばならない。兩脚は確實に揃へる。

シャツエの端に到らば其端の直ぐ前に於て、兩膝を充分に突張り體全體を特に眞直ぐに伸し、そして前方空中に投げ出す。而してサッツの勢は兩腕の補助動作により大いに增すことが出來る。

フライト　體全體を緩かに樂に伸び切り、着陸斜面の現狀によつて前方に漸進的に寄り懸ける。かくすれば正に着陸せんとする際に兩スキーは着陸斜面と平行になる。兩腕は力强く廻轉する。

兩スキーを適當に揃へ、平行にそして同じ平面に保つ。而して力强き、確實なるランディングに對する準備の爲めにフ

ライトの終りに於て視線は雪と接觸するが如く見える一點に注がれねばならぬ。

是以上に明細なことは云はれない。又有効なルールは如何なる姿勢をとるべきかと云ふことに關して說明出來ない。是は雪等の狀態によるかも知れない。主要點はスキー競走の技倆と體とスキーの完全なるコントロールを示すところにある

…注意…初進者は空中に於てよく見る姿勢である屈膝の姿勢は學ぶべく推稱されてはならない。然しこれは許さるべきであつてしかもそのジャムパァが下位の採點を得ることに從ふべきでない。これは兩脚が踏み切りの後にいきなり著しく上方に（前方でなく）引き上げられる樣な眞直ぐな位置とは異るものである。

ランディング　ランディングは確實に圓滑に體の受くるショックを減ぜねばならない。全身は充分に平均をとり、スキーはよく揃はねばならぬ。

着陸と共に兩膝を屈せねばならぬ。そして前脚は前方に突き出すと同時に輕く屈し、一般に後脚は前脚より深く屈する

着陸斜面が緩かであつたり、雪質不良の際には前脚は一層前方に突き出されねばならぬ。

着陸斜面にて、ランディングが終つたならばアプローチに於けるが如き同じ姿勢に出來るだけ早く歸らねばならない。

スウィング　二つの方法即ちクリスチアニアミテレマークに依るかも知れぬ。

以上が概略で尙スウィングはクリスチアニアミテレヤークの方法が簡單に說明されて居る。

斯樣な具體的の標準スタイルに從つて審査採點せらるゝのが、ノールウエのジャムプスタイルジャッヂの方法である。

更にノールウエースキークラブのセクレタリーである Chr. Ang. Fjeld 氏はジャムプジャッヂの助言及び暗示として各動作に於ける減點の仕方について、更に一層スタイルジャッヂの具體問題に說明を與へて居る。

この具體的減點の方法を知ることによつて、一層私はジャムプスタイルと云ふものが、左程抽象的見解の爲に、單に六ケ敷いとして葬らるゝこと無きを知るものである。

氏の方法は勿論二〇點滿點として最低〇點として簡單に且つ理想的に作成せられて居るノールウエーのジャムプ採點表を規準にして、說明されて居るものである。

アプローチでは大してジャッヂには重要さがない。此處ではジャムパアは注意して居るそして最も優れた姿勢をとることを考へて居る。而して何れのジャムパアも出發點にあつては二〇點を有つて居るのである。此處で少し位の不安定で減點せらるゝのは一―二點である。つまりアプローチで轉べば二〇點減ぜらるゝのである。

次にサッツに於ける欠點として普通一―三點を減ずるのが適當である。此處ではジャムパアが何故正しい踏み切りを爲し得ず又爲さなかつたかと云ふことの理由をジャッヂメンが洞察することは常に困難なことであるから、此點に於てこのジャッヂは最も困難なものゝ一つである。

通常の欠點はジャムパアが貧弱な踏み切りをし或は全く爲し得ない場合で、是は一般に二點の減點が適當である。餘り早く踏み切り過ぎた場合は不利であるが、同減點でなければならない。これは一般に恐怖の結果で、ジャムパアは飛躍距離を短縮する目的ですることがある。

是等兩者の欠點は飛躍距離に影響するもので二重に減點される。然し乍ら正確な時間に飛躍することによつて踏み切りの早過ぎることは善いスタイルと見做されることが出來る。然し本當に正確な踏み切りを爲さぬ場合には立派なスタイルとして認めらるゝことは稀である。吾々は亦踏み切りの遲過ぎることも多少通常の欠點と見るが、是は決して他の不確實なジャムプの例に見るものに比して、より嚴格に審査さるべきでない。何故と云ふにこれは一般に他の禍によるもので故意にジャムパアがするものではないから。踏み切りの遲過ぎると云ふことはスタイル及びジャムプ距離に惡結果を來し又非常にしば〳〵轉倒を招ぐものである。

フライト　此間に於ては多くの著しい欠點を見分けることが出來る。審判に關するスキーイングユニオンの規定では一―七點の減點が宣言されて居る。斯の如く七點と云ふ多くの點を減點することにしてあると、ジャムパアがジャムプに際して如何にして彼等が立派なスタイルをとるべきかと工夫を凝らすからである。

是は以前スキーイングユニオンが一流のランナアの意見及びスキー術の興味と云ふ點より試みたるもので、そして是をナショナルスキー競技規定中に認むることになつたものである。

夫れ故私は此處では更に喋言を避けて二、三の例を擧げて見る。

1. スキーの偏倚減點二點、2. 兩スキーの不均衡にあつては尙嚴格に懲戒する。又身體、脚部の姿勢によつて種々の欠點

がある。かゝる場合にはその程度により一—四點を減ず。

ランディング　着陸瞬間に轉倒せるものは一〇點を減ず、次に着陸後の轉倒は着陸姿勢の相違、滑走斜面の距離及び雪質等によつてその轉倒の原因が相違する譯であるから、轉倒個所、姿勢の如何をよく觀察して採點する必要がある。

例へば着陸までは凡べてジャムプスタイルは立派であつたが、着陸と同時に雪質不良或は着陸斜面の不良なりし爲に轉倒せる場合には一〇點を與へねばならぬが、又凡べて他の條件はよいが、多少の恐怖心の爲に後方に轉倒した場合には八點以上は得られないことになる。

次に不良な踏み切りで而もスタイルが良くない場合に、轉倒したとするならばかゝるジャムパアは五點以上得られない例へば不良な踏み切りで二點減ぜられ惡いスタイルで五點減點せられ、そして最後に轉倒の爲めに一〇點減ぜられたとすると轉倒後にはそのジャムパアは三點の得點になつてしまう。それ故經驗の淺い審判員は採點に當つては寛容すぎる位の傾向がある。

大體是が Chr. Aug. Fjeld 氏の具體的減點の方法であるが、若しもスタイルジャッヂメンとなる人々が、氏の具體的方法の幾分をも參照して居るならば、ジャムプスタイル審査の好參考資料となるであらうと思はれる。

實際一〇秒足らずの短時間で示さるゝ複雜なる諸動作を審査採點するこ云ふことは、誠に至難のことであり、一樣に一つの具體化したる規準を立て之に當て箝めて行くことも決して容易なことではない。

この Chr. Aug. Fjeld 氏の具體的觀察は、各人のジャムプスタイル審査に對する單なる一例と見做すことも出來得るかこ思はるゝが、現在の我が國のスキージャムプ界の狀態を大觀して、そのスタイルジャッヂ方法の問題を考へるとき、ジャムパアの數も少く、又斯技については甚だ經驗の淺いランナアの多いと云ふ點に立反つて考へて見るならば、前述せる氏のジャッヂ方法は、現在の吾々のとつて以て範とするに足る好範例であると私は考へる。

斯く考へ來つて總括的にジャムプスタイルジャッヂ方法と云ふものを考ふるに、幾多のジャムパアのジャムプスタイルを觀察するに際して、それが如何なる場合にせよ、大體スキーの操縱振りこ、體の姿勢の狀態に着眼して觀察して行くこ

とによつて、可成り具體的にジャムプスタイルの觀察を行ふことが出來ると思ふのである。即ちスキー操縱に當つてはジャムプ滑走の各瞬間の動作に際して、兩スキーが不揃への位置にあらざりしか、角附けせることなかりしかと云ふが如き事柄を觀察することに留意し、又體の姿勢の觀察にあつては、滑走中に動搖することなく、最も有効なジャムプを行ふ樣に各動作の姿勢がとられたりしか、又着陸斜面との關係は如何なりしか、フライト、ランディングの際にスキーと着陸斜面と體との三者關係がよく調和されて居たりしかと云ふが如き事をよく觀察するやうにつとむるならば良からうと思ふのである。

尙又我が國の如くアウトランの境界線の設けあるジャムプ競技にあつては、その轉倒個所と云ふものを最も注意して觀察せねばならないと思ふのである。

斯樣にしてスキーや体の姿勢の正不正、安定不安定を見る上に、更にそれ等の調和や、ジャムパアのジャムプ滑走に見る諸動作の補正の程度並びに確實度と共に餘裕の如何と云ふ事柄にも涉つて觀察の態度を決定せねばならないから、實際如何に標準スタイルが示され具體的觀察方法が說かるゝにせよ、一回もジャムプの經驗を有せず而も理解のない人には結局ジャムプスタイル審査と云ふことは出來得ない事になると私は考へる。斯樣な立場から論及して行くならば、政略的に開かるゝ樣な競技會に於て單にスキーの理論を說き、スキーテクニツクの多少を心得て居るが故に擧げらるゝジャムプスタイル審判と云ふものは、甚だ權威のない貧弱のものでなからうかと私は考へる次第である。

——一九二四・一〇・二——

スキーの長さ及び幅

岡村源太郎

スキーの長さに對して深い關係を有して居る要素としては、色々の事柄が考へられるのであるが、その中でも單なる直滑降やスウィングと云ふスキー術そのものが最も重要な位置を占めて居るのである。

直滑降の時は長いスキーが安定であるとは、既に一般に認められて居る事である。之は長滑降の時は滑降者の前後に對する安定が最も重要であつて、之に反しシュマールシュプールファーレンの名の如く左右に對する安定は比較的重きをおかないでよい爲である。輕いショックを直滑降中に受けたり、雪質の變化に依つて速度が增減した時には、概ね滑降者は左右の安定よりは寧ろ前後の安定が亂され易いものである。即ち前にのめつたり、後に身體を取られて轉倒するのを多く見受ける。

それで此の前後に對する安定度を充分ならしめるには、前後に對するスキー家の體重の基底面を爲すとも考へられる所のスキーの長さを增せばよいのである。又僅かの雪面の陷沒等は何の支障も無く長いスキーは眞直に滑つて行くのであるが、此の時スキーが短いと比較的小さな孔にも直ぐ引掛るやうになるのである。恰も長いスキーを履いた人は大船にでも乘つたやうに平氣で滑走して行く事が出來るのであつて、我々も練習場で小さな小供が大人の用ふる長いスキーに乘つて極めて安定に直滑降をして居るのをよく見受ける事が出來る。

又長いスキーは直滑降や平地滑走の時、スキーの進む方向が確固として居る、左右にずれる事やぐら〳〵と方向が振れるやうな事は非常に少い。之が又長いスキーが直滑降

を安定ならしめる理由となり、平地滑走は長いスキーが樂であるわけである。即ち一言して横滑りが少い。それでスキーの底溝は比較的淺く、數が少くても充分役立つやうになる。

更に長いスキーはスキーの全底面をより大きくする事が出來て、又スキーの幅を狹くする事（スキーの全底面積＝スキーの幅×スキーの長さ）に對する補塡を爲すので、之が前述の各種の理由と共に、長いスキーは速度がより速いと云ふ事になる。即ちスキー術の一生命を爲す直滑降と平地滑走の際の速度が、此の長いスキーに依つて充分に獲得する事が出來る。それでジャムパーはアプローチ及びランディング後の直滑降の安定とアプローチの大なる速度を得る爲めに、又クロッスカントリーレーサーも直滑降や平地滑走の容易と速度に主をおいて、比較的長いスキーを使用して居るわけである。登山者も亦その山岳の地形の許す範圍で成るべく長いのを選ぶ傾向がある。

次に一般にスウィングの時は如何か。此の時は動作は今までのやうに單調ではなくなつて、自由にスキーを左右に方向を換えたりしなければならないので、狀態は大部變つて來るわけである。即ち直滑降等が安定である代りに、細いスキーの操縱が幾分不便となる。制動をやる時、テレマークやクリスチャニアの際に、スキーを各々の一定の位置まで持つて行く事が可成困難となる。急に長いスキーを履くとスキーが動かないので困ると云ふ。之は當然の事で單にスキーに與へられる雪の抵抗のみを考へても、そのスキーが長いだけ餘分に勞力が費されなければならない。實際その增加せらる力は、スキーの長さに比例して增すより以上に增大するものである。

それで此の比較的困難である所の長いスキーによるスウィング等は、その間の呼吸を充分呑み込んで、スウィングの際に決して無用の勞力を費す事をしない。又之に依つて體の安定を亂されるやうな事のない熟練者のみに可能な技術なのである。折角直滑降に猛烈なスピートが出ても、下に來てスウィングが出來なかつたり、制動が出來ないでは何にもならない。即ち初心者は最初は少し位直滑降の不安定があつても比較的短い一九〇糎位のものを使用し、次第に熟練するにつれて長いのを選ぶやうになる。そしてその長いスキーを樂にこなし得るならば、先の長いが爲の欠點は殆ど氣が付かないし、又實際にも現はれて來ない。

更にスウィング、制動等の時に考へなければならぬ事はたとへ長いスキーではスウィング中の或瞬間の動作が困難であつても、いざ制動を充分行つて居る最中や、クリスチャニアの殆ど横滑りに移つて居る間は、反つて長いスキーは制動が充分に行はれ得ると云ふ事である。半制動の時の

谷スキーや、全制動、クリスチャニアの時の制動に與る兩スキーは、スキーが長い爲により多くの雪面を削る事となつて、制動力とも云ふものが非常に大きくなるのである。即ち長いスキーではスウィング其のものゝ動作は不便で敏活に行ひ得ないかも知れないが、その動作中の制動は短いスキーよりは一層完全に行ふ事が出來る。之は極めて明白な事實であつて、固い斜面の上で夏スキーを履いた人と共に全制動をやつて見るならば、長いスキーの人は相手の人よりも樂に思ふまゝのスピードで緩やかに制動を行ふ事が出來る。

然し如何なる熟練者でも無限にスキーの長さを增す事は出來ない。即ち前述のスウイングの際の不便が理由となつて、又魚骨登行、キツクターンの不便がある爲にスキーの長さは一定の範圍が自ら定められて居る。即ち所謂スキーゲレンデにあつては二三五糎に達するものは殆ど用ひられない。ジャムブ用スキーでも二四〇糎に達するものは不可とせられて居り、此の時はフライトに於けるスキーの保持等も考へに入れなくてはならないやうになる。又レース用スキーでも餘程地形の單調な平地の多い所でなくては二四〇糎以上のものは使用する事が出來ない。先づ我々の使用するスキーは何れも二二五糎以下と見て適當であらうと思ふ。

短い方の範圍では一六〇糎ある人なら一九〇糎以下を選ぶ理由は決して無い。之以下のものは全く特殊的の目的に使用せられるのみである。そして少し熟練したならば二〇〇糎から二一〇糎のものを使用するがよい。短いスキーは前述の欠點以外に負傷等を受ける機會も多くなるものである。

かくして長いスキーを履いたスキー家の技術を考へて見ると、その人の技術の巧拙を考へに入れなくてもスキーゲレンデに於ける種類だけでも可成變化せられて行く、その變化せられた技術は結局スキー滑走をより氣持よくするものではあるまいか。即ちスキーが長くなる爲にその重量が增す事があつても、スキー家は決してスキーを雪上よりバタ〳〵揚げて歩む事もなくて平地滑走は極めて重々しく而もスピード速く行はれ、直滑降の時は安定に而も一層速やかな勢で滑る事が出來る。スケート式滑走も容易になつて至る處新しい雪の上に美しいスプールが印せられるのを見るであらう。又スウィング等も堂々たるものが見られるやうになり。更に長いスキーではキツクターンが困難であるが之の代用を爲す所のジャムピングスタートやジャムピングターンが盛んになる事であらう。

最後に述べなければならぬのは、スキーの長さと地形及び雪である。今まで述べた事は大體練習場附近や冬の山岳

を標準にしたのであるが、此處に春の山岳を考へると雪は概して粒狀の硬いものとなり、或は濕度を甚しく增し、更にスキーの携帶を爲す機會が極めて多くなる。即ち濕度の多い雪は如何なるスキーでも全く水分を吸收せしめて、スキーを驚くべき重量となし長いスキーの時に益々此の重量の增加を痛感せしめる。春の雪の無い土の上をスキーを負ふて行く事も多くなり四瓩以上のスキーでは重いリュックサックと共に登山家は非常な苦痛を受けなければならない單に重量のみならず、スキーの長い事は携帶上甚だ不便を感ずるやうになり、之は殊に北海道あたりの籔の多い山の中を歩く時に甚しいのである。而も雪は春に於ては大抵硬くなつて居るので、スキーが短い爲に沈降度が多くなる心配も無くて登行等は反つて短い方が容易となる。

單に以上の理由のみで、春の登山には短いスキー即ち一八〇糎以下のものが有利であつて、殊に五月に近くなると夏スキー即ち一四〇糎以下が最も合理的な長さとなるのである。たとへスキーが短い爲に滑走の不愉快な場所が登山行程中にあるにしても、前述の理由は此の欠陷を補ふて餘あるものである。而も四月下旬乃至五月の雪は殆ど一八〇糎以上のスキーには不適である。滑走快も夏スキーに及ばぬ事となつて居る上は、冬より春にかけて即ち雪の變化するにつれてスキーの短く輕くなつて行くのは當然の事であるそして又夏スキーの使用は春のスキー登山の進歩を一層顯著ならしめたものと考へる事が出來る。

地形の相違がスキーの長さを變化せしめる事は、登山用スキー或は夏スキーの短い事に依つて明かに證據立てる事が出來る。地形の複雜な點は直滑降や平地滑走のスピードよりは、廻轉や制動の迅速容易なる事が重きを爲すのであつて、山に深く入るに從つてスキーは次第に短くなると考へる事が出來る。密林の間或は急谷の細いスラロームや、スピードのある尾根の全制動は、短いスキーのみが有する優越點である。短いスキーは此の時、長いスキーよりも一層大きな滑走の實際的有効さと痛快味をスキー家に與へるものである。

之に反して單調な平地の多い地形での滑走には、最初に述べた長いスキーの優越點が遺憾なく發揮せられ、細い動作の迅速等と云ふ事は眼中に無いやうになる。フィンランドあたりの地方で、二四〇糎もある長いスキーが盛んに使用せられて居る事は、地形が平地多く簡單になるにつれてスキーの長くなる事を明かに物語つて居る。

スキーの幅もスキーの長さと同樣に種々の要素に左右せらるゝのであるが、此の時はエッヂング、即ちスウイング及び登行の際の狀態に依つて決定的意味を與へられるので

ある。

スキーの登行ではエッヂを使用する事が極めて必要な事である。そして之は雪の硬い時に一層此の問題が重きをなすものである。即ち硬雪面の登行の時動々もすると足がグラ〳〵してスキーのエッヂがうまく行かない事をよく經驗するものであるが、之が充分確實に行はれないと、登行の際の疲勞が增大せられ、速度も從つて遲くなり又登行が甚だ不愉快なものとなる。それでエッヂングの時に足がぐらつかない爲には、スキーを(正規の)エッヂングの位置に置くべく脚の筋肉を働かせねばならない。殊に下腿の兩側にある筋肉が勞せられ、同時に杖も可成大きな役目に與るのである。即ち長い硬雪上の登行の時足首が痛くなつた等と云ふのは此の理である。

次にスウイングの場合には、直滑降から僅かに廻轉せんとする方向にスキーが向いたならば、それより後はスキーの上に足を固定される事がエッヂングの主要な部分を爲すものである。即ち此の時に足がぐらついてエッヂングの時の、スキーの雪面と爲す角が甚しく動搖したり、又此の動搖を防ぐ爲に餘り大きな勞力を費すやうではいけない。硬雪面ではエンヂングがうまく行かないと云ふのは、スキーのエンヂが鋭くない時にも起るけれども、脚が大變疲勞して居て正しいエンヂングを爲す爲には餘りに脚の筋肉が弱つて居る時にも起る。

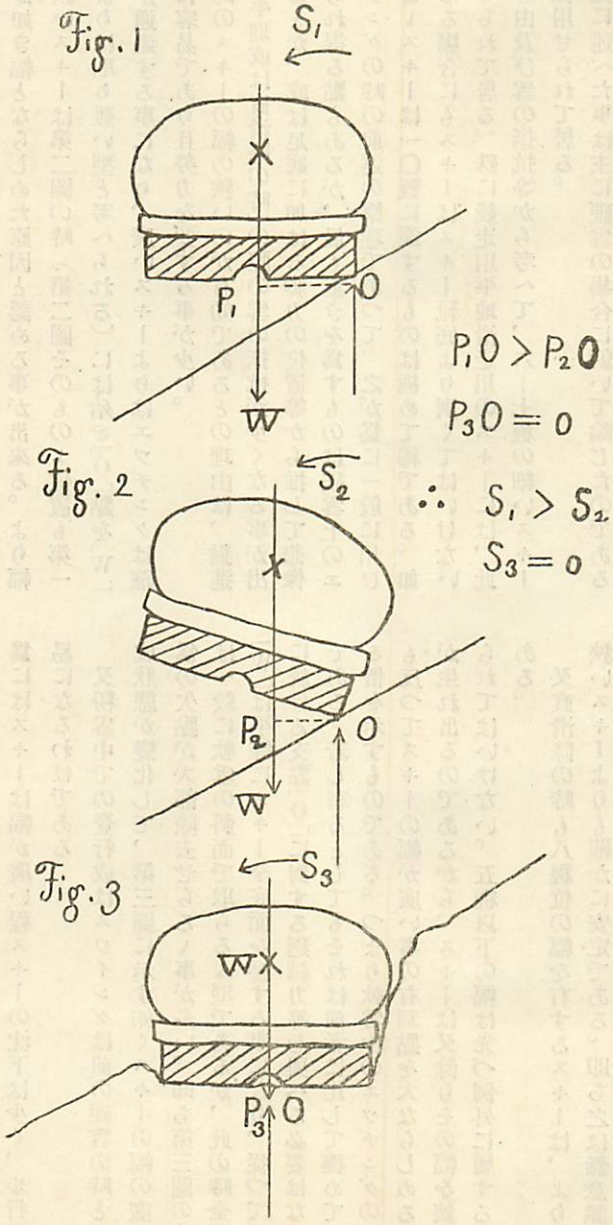
さてその足のスキー上に於ける確保は、一体如何なる力に對して爲されるのであらう。

第一圖はそれを示すものであつて「W」なるスキー家の體量は支點なるスキーのエッヂ「O」に對して、「S」矢の示す方向に廻轉せんとする力を生ずる。それで若しスキー家がその力に對して何等抵抗せずに、その力の爲すがまゝに爲ておいたならば、スキーは「S」矢の方向に廻轉して、結局平踏の位置となる。エンヂングを爲すには即ち此の第一圖のスキーの位置を保つ爲に、脚の筋肉は「S」なる力の幾割かの勞力に服さねばならぬ。

第一圖は硬雪上のスウイングの際のエッヂングの時に廣く取られる型であるが、登行の際には硬雪上では第二圖のやうにエッヂングを行ふのが原則である。之は何故であるかと云ふに、此の第二圖の型は「W」體量を支點「O」に近づける事になるので、挺子の理により「S」なる廻轉力は可成小ならしめる事が出來るからである。即ち此の第二圖の型は登行の際エッヂと雪面との融合を比較的密ならしめると共に、此の位置を保持する事は第一圖の時より遙かに身體的勞力が僅少でよい。

次に此の問題をスキーの幅の大小で考へて見ると、スキーの幅の大きな時には「W」力と「O」との距離は大となる。

第一圖　硬雪上の水平なる角付
第二圖　硬雪上の稍傾けるる角付
第三圖　軟雪上の水平なる角付



従つて幅廣いスキーはエッヂングの時により大きな筋肉的努力と巧緻さを必要とするので、之がスキーを我々現在見るが如き幅とならしめた原因と認める事が出來る。より幅の狹いスキーは第二圖の時（第二圖そのものゝ位置も第一圖よりは取り難い型と考へられる）には殆ど「O」點を「W」線が通過する事になり、廣いスキーよりはエッヂングは確かに容易であり且勞力を要する事が少い。

此のスキーの幅の狹いのが有効であるとの理由は、猶進行（平地或は直滑降の時）の際の雪の抵抗が少くなる事が出來るとか、或は足底に加はる脚力の位置等から推して想像せられ得る點もあるが、最も重きを爲すものは硬雪上のエッヂングの時の前述の原理であつて、之が爲に一般に用ひらるゝスキーは一〇糎に達するものは極めて稀である。如何なる場合にもスキーはスキー靴底より廣くてはいけないとせられて居る。殊に競走用平地滑走用のスキーには、此の理由及び雪の抵抗等から考へて、六—七糎の細いスキーが採用せられて居る。

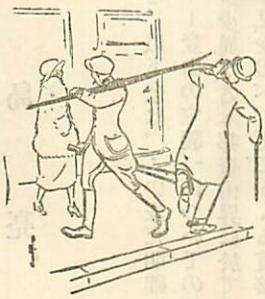
先に述べた事は主に硬雪の場合に就いて論じたのであるが、次に軟雪の時の狀態を考へると、スキーの幅は決して思ひ切つて狹くする事が出來ない。即ちスキーは一定の底面積を有しなければならない。スキー家の一〇數瓩と云ふ體重はスキーの（スキーの幅×スキーの長さ＝）全底面積で、スキー家が軟雪中でも深く沈む事のないやうに支持の役を務めなければならない。それで粉雪地では此の目的の爲にはスキーは幅が廣い程スキーの沈下は少く、歩行も容易になるわけである。

又粉雪中での登行或はスウイングは前の硬雪の時とは可成狀態が變化して、第三圖に示す如くスキーの幅の廣いが爲の欠點が大部除去せらるゝ事が多い。即ち第三圖の位置は一般に軟雪の斜面で取らるゝ型であるが、此の時全體重「W」は平等にスキー全底面を壓する事になり、從つて前者に於ける支點「O」に對する廻轉力等を與へる必要はないのである。若し有るとしてもそれは前者に比して極めて小なる價を示すものである。つまり軟雪中のエッヂングの時にも反つてスキーの幅が廣い事の有利點を大ならしめる要素が生れ出るのであるから、スキーは又餘りその幅を狹くせられてはいけない。五糎以下の幅は先づ例外に屬するのである。

又直滑降の時も八糎位の幅を有するスキーは、より幅の狹いスキーよりも確かに安定である。即ち之は無意識的にスキーがエッヂングせらるゝ事が、スキーの幅の廣い爲に防がれて、直滑降も相當の幅のある長いものが甚だ安定である。ジャムプ用スキーが幅廣く長く製られ、粉雪に富む山岳或はスキーゲレンデには幅の廣い中位度の長さのスキ

ーが賞用せらる。又體重の大なる人は比較的廣いスキーを用ひなければならない。それは丈高い人には長いスキーが適する事と隻稱せられて居る事である。即ち婦人用スキー等は割に短く幅も六糎位の所が廣く用ひられる。子供用も勿論短く狹いスキーが採用せられる。然し夏スキー等のやうな大の男が重いリユックサックを負うて履くやうなものは、その丈夫さの點や體重保持その他の理由で、短い割に幅を餘り狹くする事は出來ない。

以上スキーの幅と長さに就いて大略の記述を試みました餘りに粗雜な説明であると評せられ、或は餘り分り切つた事であると云はれる人もあるかも知れませんが、それは此の問題を取扱つた私の無智の致す所であります。幅と云ふてもベンド、中央部、テール等と論じたならばまだ〳〵考ふべき重要な事が含まれて居る事を附言致します。



再び冬季登山とスキー登山の定義について

大島亮吉

嘗て余は本誌十三號誌上に、この「冬季登山とスキー登山との定義」についてマーセル・クルツツの見解を紹介した。その後またこの問題についての新しい所説も眼にし、また余自らのこのやうな問題を特に本邦スキー登山界に重要な意義をもつ本誌上に發表したその動機についても一言したきものがあつたが、格別このやな問題は大して重要なことではないのと、ひとつには機を得なかつたので、そのまゝにうちすぎてゐた。しかるに最近の本誌四〇號に於て加納一郎君の「北海道スキー登山史」をみるに於て、そのスキー初登山として記錄するに際し、マーセル・クルツツの定義によつたことを記してあつた。實にこの一事が余をして、こゝに再びこの題目について筆執るの動機をいたさしめたのである。以下余は、この未だ明確に決定せざる「冬季登山とスキー登山の定義」についての新しい所說を叙し、事態自ら多少異なる本邦登山界に於てのそれが適用についての余の卑見をのべ、更にかゝる直接登山そのものに關せざる題目の登山界に與ふる實益について記したいとおもふ。

マーセル・クルツツがその「冬季登山とスキー登山についての定義」なる所說を發表したのは一九一八年の瑞西スキー年報に於てである。而してその定義とは次のやうなものであつた。（詳しくは本誌一三號を參照）

(A) **冬季登山の定義**

暦に定められた冬なる期間（十二月二十三日より三月二十三日まで）のあひだに、徒歩或ひはスキーを使用して行はれたすべての登山を以つて、冬季登山とする。而して若しスキーが使用せられたる場合には、そのことは特記せられねばならぬ。

(B) **スキー登山の定義**

時期の如何を問はず、すべて一部的にでも全体的にでもスキーの使用せられた登山をば、スキー登山とみる。スキーは登山にまでの一手段である。故にスキーの使用は機械的に雪質狀態に附隨する。條件がよければ、スキーは使用せられ、條件が悪ければ、スキーは除去せられることになる。

これがクルッツのなした定義であつて、これで全く明確に決定せられたやうにもおもへる。しかし巨細にみるときは、まだこの定義には一二の考慮を費すべき點が殘つてゐる。これに對する批判と新しい見解を與へたものはやはりかのアーノルド・ランである。ランは一九二〇年のブリッティッシュ・スキー・イーヤ・ブックに於て「なにを以つて冬季初登山、スキー初登山は成り立つか」といふ一文を發表してゐる。これは全然、クルッツの所說を紹介して、それに對する彼れの批評と新見解をのべて、クルッツに答たものである。順序として、こゝに彼れのその批評と新しい見解をのべる必要がある。これはクルッツの所說に答へてゐるのだから、クルッツの所說を讀んでからでないと、よく了解しがたい個所もあるだらうとおもはれるから、それ〴〵のところに於ては出來るだけわかるやうに書き直すか註を加へて置くやうにする。以下アーノルド・ランの叙論にうつる。

「マーセル・クルッツ君の「冬」といふものゝ期間に對しての定義は、たしかにひとつの確然とした時期を定めてゐる點も良いし、また特に人々に一般によく知られてゐる暦に定められた冬といふ期間をとつたといふことも良い點であるけれどもこの暦に定められた冬といふものの期間も冬季狀態といふものゝ定義としては甚だ薄弱な根據しかもつてゐないと、私（アーノルド・ラン）はおもふ。暦の冬（十二月二十三日より三月二十三日まで）は正しく赤道より北のいづれの地點に於ても同じである。三月二十四日は北極では暦の春であり、そして三月二十一日は赤道の北五六哩の地點では暦の冬である。若しも貴君（マーセル・クルッツを指す）が定義した冬の期間が毎冬同じであるとするならば、ひとつの定められた時期内に行はれたすべての登山を、貴君の冬季登山の定義内に定めてしまうことは、私にはまた全く專斷的なものであるとおもへる。クルッツ君の指適したやうに、冬季狀態といふものは毎冬少しづゝ

ちがふ。このいつも少しづゝちがふ毎冬に對して、いつもきまりきつた時期を置こうといふ定義は純然たる傳統的なもので、又便宜主義である。この點では、例へばツユーリッヒのアカデミッシェル・アルペン・クルッブがアルプスの冬なる時期を十一月一日に始まつて、四月一日で終ると定義したのを是認するのも、暦の同樣に專斷的に定めた冬の時期を是認するのも、全く同じことになるぢあないか。加ふるに暦の冬は決して自然のつくつた定義ぢあない。單なる人間が、北はいつも冬の狀態にあるところの北極から、南はいつも夏の狀態にある赤道までの各緯度の地に對して冬なる、時期にある妥協をして定めた季節の期間にすぎない。だから、前記の二個の同樣に人間の專斷的に定めた定義のうちで、私はむしろ、少なくとも普通のアルプスの狀態を基礎としてゐるツユーリッヒのクルッブの定義の方をとりたいとおもつてゐる。クルッッ君の用ひた暦の冬では、眞冬である十二月二十一日に行はれた登山を冬季登山のうちから排除し、すでにアルプスの春のあけぼのである三月二十一日に行はれた登山を冬季登山のうちに入れるやうなことになる。私はそんな傳統的な季節の定められた期間には全然拘泥しないで、すべての登山をその眞相に於て判別することをとりたいとおもふ。即ち、冬季の狀態のもとに行はれた登山が冬季登山であるとなすのである。十二月、一月、二月、三月に行はれた登山はいつも冬季登山である。なぜならば、これらの各月のあひだハイ・アルプスは冬雪を以つて深く、そして谷々も、その大部分は、同樣に雪に蔽はれてゐる。このことを以つて私は冬季狀態となすのである。十一月と四月はこの點でははつきりしない。五月はたしかに春だ。なぜならば雪線は氷河地帶まで這ひのぼつてしまふし、日中は長くなり、太陽の光りは過度に暖かい。一九一七年の十月は非常に寒い月だつた。十月の半ばに於てすでにミュウルレンには完全な粉雪が一米突以上もあつた。十月の半ばには晝間は二月の半ばと同樣な短かさである。この特別な十月の半ばに於て行はれたハイ・アルプスの登山は確實に冬季登山でなければならないだらう。そしてその翌年一九一八年の十一月二十日に於てはこれはまたそこには九〇〇〇呎以下には雪は少しもなかつたそれ故その日に於ての登山は全く冬季登山ではないだらうだからこう云ふことが言へるとおもふ。即ち十二月から三月の終りまではいつも冬であり、十月は時として十一月は通常はいつも、四月の前半は殆んどいつも冬の狀態である。」

以上はアーノルド・ランのクルッッの「冬季登山」についての見解とみるべきものである。これによつてみると、たしかにクルッッの「冬季登山の定義」には、その暦の冬

こ云ふ一定の期間をとつた點に於ては、その期間内に冬季登山でないものはない。即ち例外がないこ云ふことはあるが、その暦の冬なる期間外に行はれた登山にも、時として全く冬季登山の實質をそなへたものがあるのに、それらは全然除外せられることになる。アーノルド・ランはその點に意をこめてゐる。予もまた「定義」である以上は例外のあることには贅し得ないやうな氣がする。そこでランは新たに「冬季登山」についての定義を提唱したのである。それは「冬季狀態の下に行はれた登山が冬季登山である。」といふことで、その「冬季狀態」といふことは、どんな狀態であるかといふと、「ハイ・アルプス及び谷々の大部分が冬雪（この冬雪 Winter Snow といふものについては、同じくランの書いれスノー・クラフトにある説明によれば、冬に於て通例な、特徴とすべき雪質のものを意味するので、粉雪のことである。）に深く蔽はれてゐる狀態を言ふのである。なる程この定義に限り、すべての登山を個々その眞相に依つて判斷してゆけば、時期的の例外な冬季登山は洩れなくその定義内に含めることが出來るのである。予としても定義こしてはクルッツのものより、このアーノルド・ランのものをとりたいこおもふ。たゞ、しかしひとつアーノルド・ランの言ふ「冬季狀態」の説明である。それによればほゞ冬季狀態の最も特徴たるべきものを簡單に言ひ表はしてゐるが、しかし、またこの冬季狀態も確然たる境界のあるものではない。冬雪がそんなに一体を蔽ふてゐない時で、しかも日の短かく、寒さの強い時もあらう。ことに春に近づてのけじめは全く曖昧なものであらうとおもふ。この點ではクルッツの定義の方が確然としてはゐる。ランの冬季狀態は文字で言ひ表せば確然としてゐるやうだけれど實際に於てはこの「冬季狀態」といふことも各個人的な觀察によるものだからである。けれど各個人的の觀察には多少の相異はあれど、大体に於てそうはちがはなからうから予としてはそれらの極微な點をすてゝ、ランの定義をこりたいとおもふ。

次ぎにはクルッツの「スキー登山」に對するランの批評である。これは登山の上のスキーに對するランの見解とクルッツの見解この相異から來たものであつて、全く双方ゆずるところがなければ確然と解決することのない問題である。とにかくランのクルッツが云ふ「スキー登山の定義」についての所言を次ぎに書くことゝする。

「さてクルッツ君の「スキー登山に對する定義」についてもまた私はある除外を置かなくては、それに同意することは出來ない。なぜならば、疑ひもなく私は彼れの云ふ「スキーはたゞ登山の一手段である」（Le skin'est gu'un moyen d'alpinisme.）といふ言に全然賛成できないからだ。それは、

たしかに、クルツツのスキーに對する見解である。彼れはたまゝ非常に立派なスキーランナーなのだが、しかし本來に於ては彼れはマウンテーニヤである。だから彼れはよくスキーで高峰を登つても、それに於て良いスキーの滑走を得ることが出來たか否やに就ては全然意をとめない。この點が即ち彼れが五月よりは二月に多く登るといふ理由のひとつである。（クルツツはアルプスの二月を以つて高山の最良スキー登山期としてゐるが、ランは五月を以つてそれとしてゐる）私にとつては、アルプスのスキー登山がその私の目的點である峯の頂に達することが出來ず、そしてまたその登山に於てのスキーの滑走が質に於て劣るものであつたならば、それは完全な成功といふことは出來ない。アルプスの大氷河を完全な雪質のときに完全に滑降するの悅樂を味つたものには、クルツツのスキーを單なる「登山の一手段」となして輕蔑的にみなすことには決して贊成できないだらう。あるスキーランナーが言つたやうに、このクルツツの言とは全く反對に「アルプスはスキーのための道具」だと云ふこともある立場よりみては實際には言へないことでもない。山をば全然滑べり下るものであるとみることも、またスキーイングを全然冬に於て山頂に達するための一法とみることも、ともに餘りに一方に片よりすぎた見方である。そしてこの兩つの見方のうちでは、私は勿論クルツツの見解をとりたいとおもふ。なぜならば、山の美はスキーイングの運動の美よりも、より高き位置に置かれねばならないものであるからだ。しかしそれといつて後者の美は決して輕んずべきものではない。私等にそんなに多くの美しい印象を與へてくれたスキーはスノー・ラッケットのすぐれた一種とみなされてあるべきではない。たとへばクルツツは二月七日に於ての彼れのテッシュホルン（一四、七五八呎）の登山を、彼れがわづかその八六六一呎の高さまでしかスキーを使用しなかつたのに、それを「スキー初登山」だとしてゐる。然るに五月にはクルツツのスキーをすてた地點より四〇〇〇呎も高いミシャーベルヨッボまで愉快にスキーで登れる。二月には雪質はよくない。それだからクルツツは利口にもスキーを早くすてたのだ。五月にはテッシュアルプまで完全な滑降をたのしむことが出來る。そして時にはツエルマットまでも眞直ぐに下れることがある。完全なスキーイングにいゝ斜面の四〇〇〇呎（一二〇〇米突）も徒歩で登つたやうな登山をスキー登山だと主張するのはたしかに誤りだとおもふ。」

これがアーノルド・ランの言だが、これに依つては別にクルツツの「スキー登山の定義」についての批評をしてある點ではその見解のちがうことをのべたにすぎず、特別に前の冬季登山の定義の場合のやうに、クルツツの定義に

かはる新しい定義をば提出してはゐない。このランとクルッッの見解の相異は、要するに登山の上からみたスキー術に對する二つの大きな立場の上のちがひである。ある一部の登山者は、スキーをば全然登山のためのひとつの手段とみて、要するにシタイクアイゼンと同じやうな種類のものとみなす見解をもつてゐる。それからまた、ある登山者は（登山者でもあり、スキーランナーでもあるといふもの）登山といふものと、スキーイング（スキーイングといふひとつの獨立したスポートの意義で）といふものとの二つのものを渾然と融合せしめてやつて行こうといふ見地に立つてゐる。前者はこゝではクッッであり、後者はランであるスキーを單に登山具のひとつと看做してしまつてゐる人とスキーイングとマウンテニヤリングとを融合させやうとまでに、スキーを親しみを以て重んじてゐる人との間には、勿論どこまで行つても一致すべき點はない筈である。この點はまつよく氣をつける必要があるとおもふ。ランはクルッッが稱えた「スキー登山の定義」のうちで、スキーの使用せられた範圍の如何を問はないといふことについて論難してゐるのだが、さてそれならば、どの程度の範圍までスキーを使用しなければ、スキー登山にはならないかと云ふやうな、實際的のことについては少しも言及してゐない。實際このことは前の冬季登山の場合の「冬」といふ時期を定めたり、「冬季狀態」といふやうなものに標準を求めたりする以上に問題はむづかしい。だからランも確定的なそれに代るやうな定義をつくることが出來ず、仕方なく制限を附してクルッッの定義を認めたのである。そしてその制限はまたすこぶる曖昧である。予はスキー登山の定義といふものを人が必要とするのなら、どうしてもクルッッの定義より他に定義しようはないとおもふ。しかしスキー使用の割合如何を問はないといふ理由を、クルッッのやうにスキーは單なる登山の一手段だからといふ理由にはをかない。登山のうへ、スキーイングのうへから、眞面目にスキーを使用せられ、そしてそれが有効だつたのなら、たとへその使用範圍がごんなにすくなくても、それはスキー登山としたい。その有効であつたといふことには勿論登山術のうへからみての勞力の經濟的使用、能率の增進等のことはもとより、スキーイングの點からみて滑走の愉快さがあつたといふことも含んでゐるのである。予等は愉快に滑走したいために勞力を多く費したこともある。ある登山に際しては全然スキーを登山の一手段とみて行つたこともあるしまたある登山ではスキーでの登降に重きを置いて行つたこともある。ランはクルッッがテッシュホルンを二月に登つたとき八六六一呎の高さまでしかスキーを使はなかつた、そんなわづかの範圍しかスキーを使はないのにそれを「ス

キー登山」といふのは誤りだと云ふけれど、クルツツのその時の記述によれば實際二月にはスキーの有効な使用範圍はその八六六一呎までだつたのだ。五月には一二〇〇〇呎までそれはのびよう。そしてスキーの使用範圍は著しく擴大しよう。けれどそれだからこ言つて五月の登山がスキー登山であつて、そのスキーの有効範圍一杯にスキーの使はれた二月の登山が、スキー登山でないといふことは言へない筈だ。予は兩方とも立派にスキー登山だと思ふ。見地のちがふことはこの場合問題にはならない。若しランがその二月のテツシユホルンに登つたとして、彼れが六六一呎以上の高さまで無理に有効なスキーの使用範圍をこえて、八六六一呎まではまだスキー登山としてのスキーの使用の割合が少ないからといふために登つたこすれば、彼れは著しくこんどはスキーこいふものにとらはれてゐるわけになるぢやないか。ランの言葉の裏にはそう言はれても仕方がないやうなものがある。

とにかく予はクルツツの「スキー登山の定義」はそのまゝ予としての特別な見解のもとにとつてもいゝとおもふ。

以上をもつて本誌十三號に發表したクルツツの冬季登山とスキー登山の定義についての其後の新しい見解を叙し、併せて予の卑見をのべたのである。念のため予のこらんとする冬季登山とスキー登山との定義をかゝぐれば次ぎのやうなものになる。

冬季登山の定義

すべて冬季の狀態のもとに行はれたる登山を以つて冬季登山となす。（アーノルド・ランの提唱に從ふ）冬季狀態といふものゝ説明はランのなした見解でほゞよいとおもふ。即ち冬雪が山全體、谷の大部分を蔽ふてゐる狀態である。冬季狀態には日中の短かいこと、寒氣の嚴しいこと、其他いろ〳〵のことがあるが、それらはみな前述の狀態のときと合致してゐる。だから大體それでいゝと思ふ。但し大體である。なぜならば、すでに前にものべたやうに冬季狀態もその前後の秋の晩くと、春のはじめのときとの狀態との間には、これを劃然と定めることはかたいからである。この冬季狀態を定めるには、そのときぐ〳〵の登山者の個人的觀察にまつていゝとおもふ。

スキー登山の定義

すべて時期のいつなるを問はず、一部的にでも、全體的にでも、スキーの使用せられた登山をば、スキー登山となす。（マーセル・クルツツの提唱せるものに從ふ。但し彼れの「スキーを登山の一手段」とのみみなす見解はとらず。またアーノルド・ランの良好なスキーの滑走を與へるものでなければならぬと云ふ見解のみにも從はず。すべて登山のうへからみて、スキーイングのうへか

らみて、その使用が範圍の如何に拘らず有効であつたといふ點による。）

以上でもつて、冬季登山とスキー登山との定義についてのことはほゞ書き終へたとおもふ。ではこの定義（予のとらんとするもの）を、實際的に本邦の登山界にとりいれんとするにあたつては、どんなことに留意すべきであるかといふに、そこにはいろ〳〵と小さな、こま〳〵した問題もあるとおもふ。然し予としては、まだこのやうなことについての卑見をのべるほどの經驗はないから、なるだけこのことは避けたいと思ふが、ひとつふたつのことについては敢へて言ひたいことがある。その第一は、スキー登山に於けるスキーの使用が有効あつたか否やといふ點についてはそれならばどうして定めるかといふ點に答へることであるこれは、前にものべた冬季狀態の場合と同じく各個人の觀察した結果にまつていゝとおもふ。特に自己のなした登山をスキー登山だとか、冬季登山だとかいふやうにそれを特殊的に範圍づけるために、自己の觀察、經驗の結果にあざむくやうなことをする人は勿論ないからである。けれど例へばサンマースキーの使用についてなぞは、實際には非常にむづかしいものだらうと思ふ。有効だつたか否かについては特にこんな場合は、充分な所論を發表されると、實に「スキー登山の定義」に對して貴重なる資料となるばかりでなく、登山術、スキー術そのものゝために益するところは大であると思ふ。

さてその次ぎには、このやうな單なる一登山形式を定義づけるといふことが、登山とかスキーとかのうへに與へる實益についてである。實にこのやうなものは全體として大局からみるときは、まさにごく小さな、枝葉の問題である甚だ重要ならざることである。しかしかゝることも決して無益なものではない。たしかに實益はある。登山そのものゝ本質的なものに對しての實益ではないかも知れないが、とにかくあることはある。それならばなにゝ對して實益をもつかといふと、それは主として登山の歴史を書く時や登山の案内書をつくる時に於てである。他の場合に於ては殆んどないと言つてもいゝ。だから予はこのことは甚だ重要なものではないと言つたのである。クライミング。ヒストリイを書くことやガイドブック。メーキングが山登りの本質的なものではないからである。それ故この問題はごく狹少な範圍に於ける人にとつて實益がありとすれば、あるのである。すでにこの問題を最初に書いたマーセル。クルツツにしても、それに對してまた書いたアーノルド。ランにしても、等しく彼れ等がガイドブックをつくりつゝあつた際にであつた問題だつたのである。クルツツは現にシュワイツエル。アルペン。クルツプが發行するワリイゼル。ア

ルペンのスキーフユウーラーをつくりつゝあるし、アーノルド・ランもブリツティツシュ・フエデラル・カウンシルで發行するベルネーズ・オーバーランドのアルパイン・スキー・ガイズの著作にしたがつてゐる。加納君が最近になつて「北海道スキー登山史」といふ一歴史に筆を執られたからして、予のかつて「山とスキー」誌に發表したクルッツのこの「冬季登山とスキー登山との定義」といふ一文もはじめてその實益が本邦登山界に對してあつたわけであらうと思ふ。（その實益の大小はとにかくとして）そしてこの實益とは單に、それではクライミング・ヒストリアンやガイドブック・メーカーに對してのみかといふに、予としては全然そうとも思はない。予はいまだいかなる登山の歴史にも筆をとつたことはない。ガイドブックは勿論つくつたことはない。然しなほ予はこのごく瑣少なことがらながら、このことには多少の興味をもつものである。勿論このことがらに關して予は、かつてカール・エッガーが言つたやうに「冬季初登山とかスキー初登山とか其他ガイドレスファスト・アッセントだなどゝいふ題目のもとに、ひとつの登山を特殊づけんとするは、甚だ滑稽にして、笑ふべき主張である。しかもそれがごく純正な登山者の間に於てさへさうである。ある峯を最初に登つたといふことは、何等の條件がつかずに認められる儼然たる事實である。しかし冬季初登山だとか、スキー初登山だとか其他のものは全く專斷的な特遇にすぎぬ」といふことを信ずる。けれど予は個人的として、だれが最初にこの峯を登つたかといふことゝ同じく、だれがはじめて冬のこの峰に登り、だれがはじめてスキーを使用してその頂に達したかといふことに興味をもつものである。予はいつも予より先きになされた山登りのすべての記述をば、深い感謝の念と興味とを以つて讀んでゐる。たしかに冬季登山とかスキー登山などゝ云ふことについての定義などは小さな問題だ。けれど現在のすべての登山の雜誌がなほごく小さな峰の小さなリツヂの新登攀のことを記錄したり、また英國のある一部の山岳雜誌がウエールスのあるひとつの岩壁について、その五十番目の變路(Variation route)についての記述をのせてゐるかぎりは、あるより大きな峰がはじめて冬に登られたことや、またある大きな雪峰や峠が、徒歩で登られるよりは、ずつと愉快に、勞少なくはじめて登られたといふことを記錄するといふことは、少なくとも興味あることだとおもつてゐる故に予はかゝる予の個人的な興味のうへからして、特にさきにマーセル・クルッツの定義を本誌上に紹介する動機は生じたのであつた。このことの眞の實益のためにといふことは、むしろ第二義的なものであつたのである。

最後に予がこの文中に於てとらんとする冬季登山とスキ

ー登山との定義について、更により滿足なるものを見出された方、及び予の考へに誤りがあつたならば、よろしく本誌上に於て叱正していたゞきたいとおもふ。（完）

彙報抄錄

全日本スキー聯盟の提議

去る一月三、四兩日大日本體育協會主催の全日本スキー選手權大會に關する豫選地代表者會議が大鰐温泉で開かれた際、右會議終了後、主催側より大日本體育協會の改造と現下日本スキー界の狀況とよりして此際全日本スキー團體を總括する統一的機關の組織に着手しては如何との提議あり。そは大日本體育協會は年末の會議に於て、改造案決定し、此によれば將來體協は直接各種競技會を開催する等の事をせず、各競技に就て一の聯合團體より二名以上の理事を出し、此により組織されたる新體協は主として國際的事務に當ることゝなる爲、全日本スキー選手權は今年限り廢止せらるゝと共に、之が主催其他スキーに關する全國的團體を必要とする機運に在りと認めらるゝからである。

そこで參會者は直ちに之が設立に就て會議し、左記の委員を選んで之に着手することになつた。

廣田戸七郎（北大スキー部）　神田茂一（高田スキー團）
加納一郎（札幌スキー倶樂部）　西澤勝次（早大スキー部）
櫻庭留三郎（樺太中央スキー倶樂部）　佐々木新七（青森縣體育協會スキー部）

委員は引續き會合して規約の根本となるべき事項を議し之が草案の起稿に着手し、次の如きものを作成した。

全日本スキー聯盟規約案

第一條　本會ハ全日本スキー聯盟 National Ski Association of Japan — S. A. J. ト稱ス

第二條　本聯盟ハ日本スキー界ノ統一連絡ヲ計ルヲ以テ目的トシスキーニ關シ本邦ヲ代表スルモノトス

本規約ニ於テスキート稱スルハスキーノ競技、登山旅行其他スキーニ關スル一切ノ運動ヲ包含ス

第三條　本聯盟ハ正會員五十名以上ヲ有スルスキー倶樂部並ニ大學專門學校スキー團體ヲ以テ組織ス

第四條　本聯盟ニ加入セントスルモノハ左記事項ヲ明記セル申込書ニ會則及ビ會員名簿ヲ添付シ申込ムベシ

設立年月、會員數、代表者、常務者、事務所、既往ニ於ケル主ナル事業

第五條　本聯盟ハ事務所ヲ札幌市ニ置ク

第六條　本聯盟ニ會長ヲ置ク

會長ハ代表委員會ニ於テ之ヲ推戴ス

會長ハ本聯盟ヲ統裁代表ス

第七條　本聯盟ニ代表委員會ヲ置ク

代表委員會ハ本邦ニ於ケルスキーニ關シ最高ノ決定權ヲ有ス

第八條　加盟團體ハ各一名ノ代表委員ヲ選出ス

第九條　本聯盟ニ常務委員三名ヲ置ク

常務委員ハ本聯盟ノ事務ヲ處理ス

第十條　常務委員ハ代表委員會ニ於テ之ヲ選出ス

常務委員中一名ハ會長在住地二名ハ事務所所在地ニ居住スルモノトス

第十一條　常務委員會ニ於テ必要ト認メタルトキハ幹事若干名ヲ囑託スルコトヲ得幹事ハ常務員ノ指揮ヲ受ケ事務ヲ遂行ス

第十二條　代表委員及ビ常務委員ノ任期ハ一ケ年トス

代表委員及ビ常務委員辭任セザルトキハソノ所屬團體ニ於テ補缺ヲ選出シ前任者ノ任期ヲツグ

第十三條　代表委員會ハ毎年十月之ヲ開會ス

第十四條　常務委員會ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ加盟團體半數以上ノ要求アルニ於テハ臨時開會スルコトヲ得

第十五條　加盟團體ハ毎年九月末日限リ本聯盟宛會員名簿ヲ送附スルト共ニ代表委員ノ住所氏名ヲ通告スヘシ

代表委員會ニ提議スベキ議案又同ジ

第十六條　代表委員會ノ開會日時、場所並ニ會議ノ日程ハ開會二週間以前ニ之ヲ通告スベシ

第十七條　會議ノ日程ハ決算報告、豫算案、前期間ニ於ケル事務報告並ビニ全テノ議題ヲ明記スベシ

第十八條　日程外ノ問題ト雖モ出席代表委員議決權數四分ノ三以上ノ同意アルニ於テハ會議ニ附スルコトヲ得

第十九條　代表委員會ハ會長之ヲ司會ス

第二十條　會議ニ於ケル議決ハ多數決ニヨル贊否同數ノ場合ニハ會長ノ決スルトコロニ依ル

但シ本規約ノ改正並ニ聯盟解散ノ場合ニ於テハ出席代表委員議決權數四分ノ三以上ノ同意ヲ要ス

第二十一條　代表委員ノ議決權ハソノ代表スル團體ノ會員數五十名以上ヲ一トシ五十名ヲ增ス毎ニ一ヲ加フ

第二十二條　本聯盟ハ毎年一回本邦ニ於ケルスキー競技ノ選手權ヲ決定スヘキ競技會ヲ開催ス

第二十三條　前條技會開催ノ日時、場所及ビ方法ハ一箇月前之ヲ公表ス

第二十四條　本聯盟ハ毎年秋季スキー年報ヲ發行ス

其他本聯盟ノ目的ヲ達センガ爲必要ナル事業ヲ行フコトアルベシ

第二十五條　加盟團體ハ毎年九月末日限リ既往一年間ニ於ケル事業ノ概要並ビニ次年度ニ於テ行フベキ事業豫定ヲ報告スベシ

第二十六條　本聯盟ノ經費ハ加盟團體ノ負擔金及ビ寄附金其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

第二十七條　加盟團體ノ負擔金ハソノ團體ノ有スル會員數ニ應ジテ醵出スルモノトス

但シ右金額ハ毎年代表委員會ニ於テ之ヲ決定ス

第二十八條　加盟團體ハ毎年十一月末日限リ負擔經費ヲ拂込ムベシ

第二十九條　會長、代表委員、常務委員ハ無報酬トス

代表委員ノ代表委員會出席費用ハ所屬團體ノ負擔トス

常務委員ノ常務委員會及ビ代表委員會出席費用ハ本聯盟ノ負擔トス

第三十條　加盟團體ニシテ本規約ニ違背シ又ハ不都合ノ行爲アリタル場合ハ代表委員會ノ議決ニヨリ除名スルコトアルベシ

然して別に十九の發起團體を撰み、此等の團體に對し、前記委員は規約草案に基き發起團體たることを勸誘說明し二月十二日此等發起團體の集會を大鰐に於て開き、創立の運びに到る樣努力すべく申し合せた。その十九團體とは

京都帝大スキー部　關西スキー倶樂部
東京帝大スキー部　六甲スキー倶樂部
東北帝大スキー部　關山スキー倶樂部
北海道帝大スキー部　砂高スキー倶樂部
早大スキー部　長岡スキー倶樂部
新潟高校スキー部　高田スキー團
小樽高商スキー部　小樽スキー倶樂部
山形高校スキー部　札幌スキー倶樂部
樺太中央スキー倶樂部　大鰐スキー倶樂部
青森縣體育協會スキー部

である。從來此種計劃は各地に於て着手或は唱導せられたことはあるが、今回の提議は全く從來全日本の選手權を決定し來つた大日本體育協會が、各地スキー家の參集せる際に發議せるものであつて、全く機會均等に各地スキー家が意見を交換し、發起するの運びとなつたものである。

尙此の際特に附記すべき事項は、北大スキー部は昨春、國際スキー聯盟より同聯盟加入に關する勸誘狀をカール・ノルデンソン氏を通じ、接受したるを以て、機會を見て此が諾否に關し各地スキー家に商議するの意を有したる由なるが偶然今回の會議に於て此を謀り、全日本スキー聯盟の成立と共に、國際スキー聯盟加入の件も自ら解決を見るの運びに到るべしと云ふことなり。（加納一郎）

新著評

板倉勝宣遺稿　菊判一八三頁（非賣）

板倉の遺稿、論文、書簡を集めたものである。故人長逝の後、友人間に此が上梓の議あり、主として畏友松方義三郎君之が整理に當り、君が外遊に立ちたる後は槇有恒氏の盡力を以て三周忌の前に出さるゝ運びとなつた。

卒業論文を除いて内容は全て山岳スキーに關する紀行文所感並びに山仲間への手紙である。靜かに讀み行くとき君がすぐれた文才と、その間に横溢する思ひ切つた皮肉、諷刺は俗界に痲痺した心を抉る。自然に對する精緻な觀察とその偉大なる力と美とに對する感受性の鋭敏なこと常規を超脱した筆の運びなど、他の到底較ぶべきものではない。「山と雪の日記」のうちの「大正池」の一節など、職業的作家の企及し得ないものがある。

山岳　第十八年第二號

山岳も追々遲刊を回復して來る。本月は十二月に發行された。内容は

北海道に於ける積雪期の登山　加納一郎

御坂山塊　沼井鐵太郎

春の燒山と火打山　冠松次郎

陸奥の山水　別所梅之助

其他雜錄である。

山岳スキー　平井左門　改造社運動叢書

アインシュタインをよび、ラッセルをよんだ改造社が、堂々卷頭に「剽窃の詫」を載せた書物を出すことになつたかと驚いたことだが、驚く方が野暮かも知れぬ。賣文、賣名の徒、とはに絶えざる世の仲であれば。

東京朝日の評に曰く「初心者に向かぬ專門書だ」とか、或は然らん。たゞその道に眼あるものは振りむかぬのみ。元來スキーの書は日本にあまり多くあり、晩霞の迷譯、東の出駄羅目、其他群小天狗の共著など數しれず、此れスキーは尙珍物、乃至流行もの、未だスキーを知らぬものゝ爲に彼等を迷妄に導くの書と云ふべく、由來スキー書にて儲けたる書肆なしと云ふ。誠に然り。此の書ミュンヘンにてデル・ウインテルを編輯せるカール・ルーテルのスキー・ツーリストを譯したるもの、それに著者の卑見を加へたりとか云ふも、著者とは何者。山岳スキーとは何物。

著者は往年蝦夷富士の八合目にて震え上りたるもの、乃至イワオヌプリ礦山への一〇〇〇米そこそこの登行に興奮

劑を要したるの徒輩。爾來山らしき山に登りたりとの風だよりも聞かず。立嶽院（自序に書いてゐる立嶽院と云ふのは立山で死んだ板倉のこと。）と知己であつたとて、アルピニストではない。（序に著者に申して置く。板倉遺稿集書簡編二一頁の初めは誰のことだかお考へなさい。）尙此處に著者にあらず剽窃者に敎へて置く。君の先輩等は中歐、北歐のスキーではなしに、日本のスキーを創る爲に何程の傳統的努力をなしたかを顧るがよい。

平井は飜譯でなしに山岳スキーを書ける人物ではない。あれだけの作文が出來たのは、山とスキー第五號の記事と比較して感心なものだ。誰かの手を借りたのでなければ、東大文學部に納めた年貢の効果か。

せめて寫眞挿圖をと手にしても、挿圖は全て原著そのまゝ。寫眞は全て得體の知れぬ外國の風景畫。たゞ一枚あつたのは東北地方の山だか原だか解らぬ森の中の幽靈寫眞。ところどころ中學校の數學が書いてある。ルーテルが屑籠へすてたものだ。

定價二圓五十錢。原著は九十錢で容易に手に入る。スキーで山へ行く程の人は誰でも持つてゐる。原著の外に有朋堂の袖珍獨和辭典を買つてもまだ之より安い。

最後に無斷剽窃一の例。第二八二頁の號笛信號は、スキー術楷梯第八九頁よりとつたもの。（加納一郎）

札幌スキー倶樂部創立

札幌市に於けるアマチューアスキー家の社交的團體として、同市に於けるスキーに關し代表的機關たるべく、設立せられたるものにして、會員を相當撰擇の上組織し、一月發起人會を開き規約草案を附議決定成立の運びとなりたり同會にて選ばれたる理事六名は左記の通り。尙事務所は北海道廳會計課三瓶勝美氏氣付との事なり。

理事長　三瓶勝美
　　菅間隆二
　　小林一勝
常務理事　中野誠一
常務理事　加納一郎
　　赤松勳

青森スキー倶樂部發會式

青森スキー倶樂部の發會式は一月十七日午後六時から青森市役所會議室に於て擧行されたが來賓、會員等百餘名出席今泉慶助氏開會の挨拶をなし次いで青森體育協會スキー部青森支部を解散して青森スキー倶樂部創立に至るまでの經過を報告し、議事に入り規約を附議し會長にドクトル佐藤信敬氏、副會長に青森市視學岡部時次郎氏を推薦し、佐藤

會長から常任幹事に吉岡龍太郎、今泉慶助、佐々木明の三氏及び幹事三十三名を指名し、本年度事業等について協議を重ね、相澤青森驛長の祝辭があり茶話會に移り佐藤正一氏等のスキーに關する五分間演說があつて九時過ぎ散會した。翌十八日會員一同津輕新城スロープへ練習に出かけたが約五百名のスキーヤーが集つて大賑はひを呈した。

第三回日本全スキー撰手權大會

各地方豫選

北海道選手權大會（北海道豫選）

第一日（一月廿四日）天候絶好　雪質良好

一〇キロレース決勝

一着　今井誠一（樽商）タイム四四分五三秒　二着　片桐博（樽商）　三着金田幸一郎（樽商）　四着松田幸藏　五着中山俊豪　六着本間四郎

一六キロレース決勝

一着　岡村源太郎（北大）タイム一時一二分四六秒　二着野中十郎　三着千葉毅　四着羽賀藤左工門　五着福田博達　六着西村與三次

午前一一時五〇分四キロ豫選開始さる。

ジャムプ競技B組午前一〇時半開始ジルバアシャンツエ斜面の雪質凍結し不良なりき、最長不倒距離一七、七米

		得點
一等	緒方直光（北大）	一七點九一
二等	小林辰雄（北大）	一七點六四
三等	伴　素彦（北大）	一七點四五
四等	末武　久（樽中）	一七點二五
五等	綱　島（札師）	一六點六一
六等	及　川（美唄）	一四點八一

第二日（一月廿五日）天候稍惡化す。雪質稍々不良

四キロレース決勝

一着岡村源太郎（北大）一九分三三秒　二着千葉毅　三着福田博達　四着大橋　五着大浦肇　六着小海鼎

ジャムプAアルファシャンツエ　最長不倒距離一二一、八〇米

一等末武久　得點一八點六三　二等椎野　三等中村　四等宮川　五等河村　六等渡部

一六キロリレー決勝

一着　樽商組　タイム一時九分二七秒

信越地方豫選

一六キロレース決勝

一着石塚英一（長岡スキークラブ）タイム九七分廿秒五分一、二着後藤五一郎　三着高橋佳明　四着菅井佐清　五着丸山浪吉　六着加久岩次郎

四キロレース決勝

一着近藤文太（歩五八）タトム一一分五〇秒三　二着近藤守榮　三着横尾三右工門　四着矢澤武雄　五着石野兌　六着石野新一郎

一〇キロレース決勝

一着磯貝稔（高田師）タイム六六分卅秒五分一　二着上石巖　三着宮下義明　四着岡庭榮　五着加土井文治　六着吉越立郎

一六キロリレー決勝

一着フラタナルチーム　タイム二時十四分廿八秒

ジャンプ競技

一、富井宣威（飯山中學）　二、吉越立郎　三、高橋精次　四、武井準一　五、堀内正人　六、金子武

廣田戸七郎著

スキージャムピング

スキー競技に於て最も重要なジャムプの一切を解説せるものである。

四六判　一七五頁
定價　金壹圓

北海道帝國大學スキー部編纂

スキー術階梯

四六判　一二〇頁
定價　金六拾錢

本年度增補改訂再刊。直接本會より御求めの方は特價金五拾錢

札幌　山とスキーの會　發行

優良なるスキー地
設備の完全を以て知られたる

五色温泉

奥羽本線板谷驛より近し。
東京より九時間にて達す。

山形縣南置賜郡山上村板谷

青山温泉

スキー地として重要な條件である所の雪質、雪量、地形等皆充分に惠まれてゐる當温泉は、年來の經驗によつてスキー家の爲に出來るだけの御便宜を計ります。

■■■■■■■■■■■

函館本線昆布驛より一里半

札幌より五時間

函館より七時間

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價　金參拾錢

※前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

※御送金はなるべく振替にてお願致します。

※六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

※前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

※本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年一月三十日印刷
大正十四年二月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯兼印刷兼發行者　佐々木政吉

札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 46. Feb. 1925. Sapporo. Japanujo.

大正十三年十月二十七日第三種郵便物認可
大正十四年一月三十日印刷納本
大正十四年二月

美滿津ノ
ウ井ンター・スポーツ
各種用具

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前

山とスキー 第四十六號
定價金參拾錢